

英語における *there* 構文の NP に関する一つの傾向への傾斜が読みとれなくもない。

5.0. まとめ

以上、いわゆる存在文を大別して三つの基本構文に分けて、それぞれの variation について見てきた。per を伴わない存在文に関しては、LP+ben+NP という、ちょうど per 構文との中間的なパターンを除くと NP+ben 式構文はきわめて限られている。それに対して per を伴った存在文の全体の頻度は per の識別の問題があり、重要な意味を成さないが、そのうち、場所を表わす副詞句を同一の節の中に持つ文が、いちおう、意味的な重複ということから、per の少くとも実質的意味の低減・虚辞化を示すものと考えられる。このような文が、決して限られたものではなく、per そのものの共起さえ見られることから、*there* 構文が13世紀の状態から飛躍的に発展し、その地歩を固めて行ったと言えるであろう¹¹⁾。そして、それは ben 以外の一般動詞へも拡りつつあることが指摘できよう。

他方、存在文の主語 NP に関して、Sawyer の主張する意味的特質は、まだこの段階ではそれを指摘できるほどのものではなく、そのような傾向が顕著になるのは恐らくまだしばらく後のことであろうと思われる。

頻 度 表

| Works | | Cloud | | | Privy | | | Rolle | | | London | | | Mand. | | |
|---------------------------|-----------------------|-------|---|---|-------|---|---|-------|---|---|--------|---|---|-------|----|---|
| concreteness of NP | | + | - | ± | + | - | ± | + | - | ± | + | - | ± | + | - | ± |
| per と LP の共起を含 む存在文 | be 動詞に よるもの | 4 | 8 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 69 | 17 | 5 |
| | be 以外の 動詞による もの | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 1 | 0 |
| per のみを含む be 動詞 による存在文 | | 20 | | | 6 | | | 9 | | | 12 | | | 126 | | |

11) Cf. R. Sugiyama, 'Existential *There* in AB Language' in *Studies in English Philology and Linguistics in Honour of Dr. T. Matsunami*, 秀文インターナショナル, 1984. pp. 184-197.

これは LP を伴っていないこと、更には *ther* そのものが角括弧つきであることで問題はあるが、*passive* の型の唯一例となっている。

次の文は存在構文というよりも、非人称構文の *it* (*hit*) との混同ととる方が妥当かもしれない。

This Emperour duelleth in somer in a cytee pat is toward the north,
pat is cleped Saduz t pere is cold ynow. (*Mand.*, 158)

それにしても場所的な指示機能を否定できずいずれとも断じ難い。

形態的には進行形である文も見られるが、動詞が限られ、また作品も限られている。

Pere is a gode cytee amonges opere where pere is dwellynge gret
plentee of po lytyll folk (*Mand.*, 138)

Pere was dwellynge somtyme a riche man. (*Mand.*, 184)

4.0. NP の Semantic Feature

少なくとも現代英語における *there* 構文は意味の面からも一つの特徴を示す。即ち、J. Sawyer によると、存在構文における主語 NP に関して、それが抽象的意味をもつものであれば *there* 構文を必要とし、具象的意味であれば 'NP + be + LP' 構文との選択も可能になってくる。¹⁰⁾ この観点から、得られたデータを調べてみることにする。但し、'per + ben' を含む同一節内に LP を持つものと *per* を欠く構文のみをその対象とした。

per を含む構文にあっては総計108例中、主語の NP が抽象的意味をもつものの (−concrete) を 1 とすると、具象的意味をもつもの (+concrete) の割合は、ほぼ2.7となり、具象名詞の方が多い。

他方、*per* を含まない存在構文では全185例中、その比は約1:8.7となり、やはり具象名詞が多い。現代英語の観点からすれば *per* を含む存在構文においては −concrete NP の比率が高いことが期待されたが結果はその逆となっている。しかしながら、その比率は、*per* を含まない存在構文のそれと比べるとかなり低いことになる。つまり、後者の9倍弱に対して、およそその $\frac{1}{9}$ の比率となっている。このような対比の上に立つと上述した Sawyer の指摘する現代

10) Cf. J. Sawyer, 'Existential Sentences: A Linguistic Universal?', *American Speech* Vol. 48, Nos. 3–4, 1973, pp. 239–245.

& 3if it be a ping pat..., per riseþ in pee a passaunt delite for to pink on pat ping what-so it be; (*Cloud*, 37)

3it pere abydeþ contynuelly with him in court .l. mil. men at horse And .cc. Mill. men a fote withouten mynstrelles (*Mand.*, 162)

And all the dayes of the 3eer pere eten in his houshold t in his Court .xij. Erchebyssshoppes t .xx. Bisshoppes. (*Mand.*, 184)

...pat per schal leue 3it after, bitwix pee & pi God, a nakid weting & a felyng of pin owne beyng: (*Cloud*, 83)

t he sawgh in avisioun pat pere cam before him a knyght Armed all in white (*Mand.*, 147)

And 3if pere falle werre in ony syde to the Emperour anon...(*Mand.*, 155)

上四文は主節，下三文は従節の中に per(e) と一般動詞との連結が見られるが，いずれも同一節内に特定の場所を限定する副詞句を伴っている。即ち，動詞 ben の場合に見たと同様，意味的に重複しているわけであり，per(e) は殆んどその内容を持っていないと見てよいであろう。

このパターンに関して次のような文がある。

And pere lith the body of hym full honourably in here temple pat the Sarazines clepen Musketh. (*Mand.*, 26)

これも先の 7 例同様 pere と副詞句 'in here temple' は意味的に重複し，従ってこの pere も 'Existential *there*' であると考えられるが，注意すべきは，主語 NP が definite であることで，それはこの構文の本質的特徴である単純判断形式と相容れないものである。これは *Mand.* の一例のみであることを考慮に入れるべきであるにしても，この構文の未成熟な一面と考えることも可能であろう。

3.4. その他

London に次のような 'ben + p.p.' の型が見られる。

Also, a-yeins the forseyde seconde eleccion, [ther] was made mochel ordinance be John More, Richard Norbury...(*London*, 25)

And panne in pat contree dwelleden manye gode cristene men
(*Mand.*, 173)

この場合、一般動詞の範囲をどの程度まで認めるかという問題があるが、少くとも上述のような典型的なものに限って言えば、このパターンは *Mand.* に集中している。

3.2. per+V+NP

それを 'Existential *there* (per)' と見るか否かは個々に検討を要するにしても、少くとも *there* 構文が期待できる環境で、per が ben 以外の一般動詞を伴った文も少くない。

for per will algates folow & go wip pi doying a nakid felyng of pi
blynde beyng (*Privy*, 157)

3it neuerpeles per comounep & folowp wip it a maner of goostly
sist. (*Privy*, 165)

it felle one a nyghte,..., in pe begynnynge of my conuersyone, pare
appered to me a full faire zonge womane (*Rolle*, 5)

...ther kom in an horrible companye of criers, (*London*, 28)

And whan it cam to the ende of .ix. monethes pere com a voys to
him t seyde: (*Mand.*, 17)

And pere cam doun a sterre t zaf light t serued him with claretee.
(*Mand.*, 57)

これらは、いずれも indefinite NP の導入・提示がなされる文脈で、per はいずれも程度の差こそあれその機能を滞っていると考えられないことはない。これに対して、動詞 ben の場合と同様、客観的判断の有用な手がかりとなる LP との共起はどうであろうか。

3.3. LP を含む per+V+NP

in so moche pat zif it be a ping pe whiche greuep or hap greuid pee
before, per risep in pee a teenful passion & an appetite of
vengaunce,...(*Cloud*, 36)

peynture (*Mand.*, 36)

Pere ben also in pat contree a kynde of SNAYLES pat...(*Mand.*, 128)

And pere ben also in pat contree manye CAMLES (*Mand.*, 193)

次の文では一例ながら文頭位に per と LP が置かれた型が見られる。

And pere betwene the mount Olyuete t the mount Calilee is a chir-
che where...(*Mand.*, 65)

これは形としては、pere と be 動詞との間に場所の副詞句が割りこんだ形で、pere と be 動詞との距離が離れすぎて 'pere is' の語連結ととるよりも、pere は次に続く副詞句を導くものと解するのがより自然であろう。

次の文は特異である。

In Egypt also pere ben dyuese langages t dyuerse letteres t of oper
manere condicioun pan pere ben in oper partes (*Mand.*, 34)

ここでは pan 以下の節には 'pere ben' があるのみで、主語の NP がない。これは *there* 構文が確立した現代英語にあっては普通の現象であるが、それが一例ながら、ここに見られることは注目すべきことであろう。つまり、per に主語性が感ぜられるために主語の NP が省略されたと考えることも可能であろう。

3.0. これまで per と ben の結合による存在構文を見てきたが、現代英語では一般動詞の一部も '*there* 構文' を形成する。そこで、次にこの観点から得られたデータを検討することにする。

3.1. LP+V+NP

現代英語の観点からみて、一般動詞を含み '*there* 構文' が可能であろうと思われる文が以下のように per を欠いた型でも見られる。

And abouen it ouerthwart lay a tre pat...(*Mand.*, 62)

And betwene the hill t this garden renneth a lityll broke of
water...(*Mand.*, 66)

3it es per a dyuersite by-twix gastely & bodily dedis; (*Rolle*, 37)

2.6. Per+ben+NP+LP (従節)

従属節においても先に見た主節の場合と同様に per と LP との共起のパターンが見られる。

to pis I answere & sey pat pou schalt wel vnderstonde pat per ben
two maner of liues in Holy Chirche. (*Cloud*, 31)

For o ping I telle pee: pat per was neuer 3it pure creature in pis liif
(*Cloud*, 47)

& 3if pee penk pat per be any mater per-in (*Cloud*, 130)

3if it so had ben pat per had ben none hier perfeccion in pis liif bot
in beholding & in louyng of his manheed (*Privy*, 170)

全6例と数は少く、しかも *Cloud* と *Privy* のみといった極端な偏りを示す。主節におけるこのパターンでは圧倒的多数を示す *Mand.* に従節内ではそれが全然見られないという事実はどのような事情によるものであるのか定かでない。

2.7. NP+per+ben+LP

per と LP が共起する文でも主語 NP が文頭に出ることもある。

Rethirne and susteryne bodely and goostely, two maner of states
ther bene in holy chirch,...(*Rolle*, 21)

Many gode cytees pere ben in pat contree (*Mand.*, 136)

Manye othere yles pere ben in the lond of Prestre Iohn...(*Mand.*, 99)

主語文頭位の他のパターンの所でも述べたが、ここでも 'many(e)' や数詞が主語の中に含まれている。

2.8. その他

次の文では be 動詞と主語の間に場所の副詞句が割って入った型 (per+ben+LP+NP) を示す。

And 3it pere is at Alizandre a faire chirche all white withouten

が、一つにはそれが旅行記調の見聞録という内容であることから、存在・提示の叙述が絶対的に多いことからくることであるが、あるいはこれは原本のフランス語の影響によるものかとも考えられる。その意味から、同一節内における *per* と *per-in* の重複が *Cloud* にほぼ同文ながら、三度現われるということは大きな意義をもつことになる。

2.5. LP+per+ben+NP

同じように同一節内において *per* と LP が共起するが、LP が文頭位に出たために、*per* と接触する形となった文も少くない。

& also, on pe toper partye, per ben sum creatures so stronge in spirit (*Cloud*, 94)

And vnder it per is a town pat hight Sobch (*Mand.*, 70)

In pat cytee of Damasce per is gret plentee of welles (*Mand.*, 81)

And within the palays in the halle pere ben .xxiiij. pyleres of fyn gold (*Mand.*, 141)

And bezonde peise yles pere is another yle pat is clept PYTAN. (*Mand.*, 198)

同様に上記二つの要素が接触するもう一つのパターンがある。

Many oper dyuerse folk of dyuerse natures ben pere in oper yles abouten (*Mand.*, 134)

Anoper yle is pere toward the north in the see OCCEAN (*Mand.*, 190)

これは *be* 動詞を中心に左右が入れかわった型とも解され、おそらく強調のため主語 NP が文頭に出されたものと思われるが、このパターンはわずかに上記の2例のみである。ここでも ‘many’, ‘anoper’ の語が文頭位に見られる。

また、次のように文頭に他の要素が来て、それにひきずられて ‘per+ben’ が語順転倒を起していると思われるパターンも見られる。

And perefore is pere dere tyme in pat contree. (*Mand.*, 28)

And pam is pere another chirche right nygh pat is clept... (*Mand.*, 53)

And pere is a full faire vale bothe on pat o syde t on pat other of
the same ryuere. (*Mand.*, 69)

For sum tyme per was a kyng in pat contrey (*Mand.*, 102)

And pere ben .ij. kyngdomes in pat contree. (*Mand.*, 172)

...as pough pere had ben a bataylle between .ij. kynges t the myghty-
est of the contree (*Mand.*, 189)

これらの文においては、いずれにも *per* と *LP* との共起が見られ、少なくとも統語的には現代英語におけるそれと全く変りはない。そして意味的にも不定の主語の存在もしくは提示がなされている。

この *per* と *LP* との共起がさらに極端な形となると、場所の副詞としての *per* そのものとの共起となって表われる。これは現代英語においてはごく普通の現象であるが、この点に関しては今回対象としたテキストの中には次のような文が見られる。

For parauenture per is some mater per-in, in pe beginnyng or in pe
middle,...(*Cloud*, 2 & 130)

& 3if pee penk pat per be any mater per-in pat...(*Cloud*, 130)

but now pere is not but a lytill village t houses a brood here t pere.
(*Mand.*, 74)

And pere is more plentee of peple pere pan in ony oper partie of
ynde for bountee of the contree (*Mand.*, 135)

以上の5例がそのすべてであるが、*Cloud*の例は *per* そのものではないにして *per-in* が付加され、また (*Mand.*, 74) では 'here t pere' の形ながら *pere* そのものが含まれ、(*Mand.*, 135) に至ってはまさに場所の副詞としての *per* が単独で、'per+ben+NP' に改めて付加された、ここで言う形態的重複の典型的な文となっている。

これらは明らかに文頭位に先行する *per(e)* が、副詞 *per(e)* のもつ本来の場所的な指示機能を失っているか、あるいは、かなり弱めているため、新らたにその役を果すことばが必要になり付加されたと解される。従って、このパターンの出現は 'Existential *there*' 構文の成熟度がかなりな程度進んでいる段階にあることを示している。

場所の副詞句と *per* との重複は圧倒的に *Mand.* に多く、偏りを示している

このパターンは全部で24例見られるが、その $\frac{3}{4}$ の主語 NP に *oper* (*anoper*) か *summe* が含まれている点が注目される。そこには対比・対照といった共通の文脈が指摘できるかも知れない。この他の文においても一例を除いては主語の NP 中に数詞や *many* が含まれ、やはり文頭位の *focus* を意識したパターンであろうと思われる⁹⁾。現代英語においても同様なパターンが見られ、存在構文の一つの強調形式とみなしてよいであろう。

2.4. Per+ben+NP+LP

前にも述べたように、*there* (*per*) 構文を考察する場合、指示副詞のそれとの識別の問題が常につきまとう。前後の *context* から判断するにしても大なり小なり客観性に欠け、曖昧さが残る。ところが、問題の、いわゆる、‘*existential there*’ が意味的に殆んど虚辞に近いという主張の一つの根拠をなすものが、同一節内に、別の場所の副詞(句)が含まれることである。この形態的な、場所の副詞(句)との重複(共起)は‘*existential there* (*per*)’を識別する有力な客観的標識となっている。

このようなことから、ここでも *per* と LP とが共起するパターンの出現が大きな意味を持つことになり、少し詳しく見ることにする。以下に見られるように、それは決して少い数字ではない。

For & per be a man or a womman in any companye of pis
woreld...(Cloud, 48)

And pere ben .ij. kyngdomes in pat contree. (Mand., 172)

And pere ben nouper thefes ne robboures in pat contree (Mand.,
165)

And pere is a merueylouse custom in pat contree (Mand., 160)

And so pere is no mo briddes of pat kynde in all the world (Mand.,
30)

And pere also is a ston in a wall besyde the zate of the
pyleer...(Mand., 60)

9) 現代英語において、通常の *end-focus* に対して *focus* が前位置に移されることがある。それは ‘usually to contrast it with something already mentioned, or understood in the context.’ であり、Leech & Svartvik は特にこれを ‘contrastive focus’ と呼ぶ。(A *Communicative Grammar of English*, Longman, 1975, §415.) G. O. Curme にも同様な記述が見られる: For especial emphasis the subject word is sometimes placed before *there is* (*are*), followed by the modifiers of the subject. (*Syntax*, Heath/Maruzen, 1931, 4 II C).

Pere ben white gees rede aboute the nekke (*Mand.*, 135)
 And pere ben lyouns all white gret t myghty. (*Mand.*, 193)
 Pere ben also manye oper bestes full wykked t cruell (*Mand.*, 193)

これらは、つまり ‘per+ben+NP+adjectivals’ という構造となっているが、現代英語の観点からすれば極めて限られた構文である⁷⁾。先の ‘LP+ben+NP’ の項でも述べたが、この場合、いずれも NP に直接かかる後置された限定修飾語句と考えられなくもない。この点に関して、Jespersen は問題の位置に名詞も来得ることを指摘して ‘predicative’ とするのが正しいとする⁸⁾。

2.3. NP+per+ben

時に主語 NP が ‘per+ben’ の前の文頭位に来ることがある。

Neuerpeles menes per ben in pe which a contemplatif prentys
 schuld be occupyed,...(*Cloud*, 71)

Two pinges per ben pe whiche ben cause of pis meeknes, pe whiche
 ben peese: (*Cloud*, 40)

Pre men per weren pat most principaly medelid hem wip...(*Cloud*,
 128)

& somme per ben pat fynden pe dore sone,...(*Privy*, 159)

Also, oper par bene pat ere mare gostly,...(*Rolle.*, 39)

t manye opere pere weren (*Mand.*, 71)

And summe per ben pat gon on pilgrimage to this ydole
 pat...(*Mand.*, 115)

And oper snayles pere ben pat...(*Mand.*, 129)

Anoper yle pere is pat men clepen OXIDRATE t anoper yle pat
 men clepen GYNOSOPHE (*Mand.*, 196)

7) 筆者の限られた調査の中でも Hemingway に次のような一例が見られる。There is an Indian girl very sick.

8) Cf. Jespersen: *MEG*, 17. 7₂. 例示された例文は Thackeray からのものである。(somehow there are some men *gentlemen* and some not, and some women *ladies* and some not).

For paire es na man pat lyffes with-owtten syn (*Rolle*, 45)
 Per is no man pat may assende unto heuen (*Cloud*, 111)
 for at pe first tyme per ben bot ful fewe pat ben so specialy touchid
 & merkyd wip pis grace...(*Privy*, 170)
 Also pere is a noper maner of dyamandes pat ben als white as
 cristall...(*Mand.*, 106)

また NP が to 不定詞に従えるパターンも見られる。

per is pan anoper cause to be mekyd vnder (*Cloud*, 44)
 But pere is no water to drynke,...(*Mand.*, 29)
 pere ben tydynges to warnen the Emperour of sum rebellyoun asent
 him. (*Mand.*, 160)
 And per is a full fair brigges to passen ouer the dyches. (*Mand.*,
 141)

少数ながら、現在分詞の例も見られるが、いずれも *Mand.* に限られている⁶⁾。

t pere ben gode ryueres berynge schippes. (*Mand.*, 99)
 ...scheweth wel pat pere ben folk dwellynge be many redy tokenes
 (*Mand.*, 173)
 And 3if pere ben .x. men or .xij. men or mo dwellynge in an hows
 (*Mand.*, 192)

特に最初の例 (99) の現在分詞は自らの目的語をとっている点、特異である。
 X の位置に形容詞句が来ることもある。

& 3it per is no soule wip-outyn pis grace, abil to have pis grace
 (*Cloud*, 69)
 And pere is a full fair chirche all Round t open aboue t couerd with
 leed (*Mand.*, 49)

6) Jespersen は、このパターンの存在を OE に認める。そして特に 'dwelling' は主語に先行するとして (*Mand.*, 213) の例をあげている: where there is dwellynge gret plentee of the lytylle folk. (*MEG.* IV, 14.8 (4)).

れた構造を示す。

2.0. これまでは、ben 単独による種々の存在文を見てきたが、次に per を伴った存在文を見てみることにする。但し、ここでは、いちいちの per がいわゆる ‘existential *there (per)*’ であるか否か、あるいはその empty の度合いがどの程度であるのかの判定は、それが主観的判断によるものである限りは避け、主語の NP が不定名詞（句）であるものすべてを考慮の対象とする。

2.1. Per+ben+NP

この型は ‘per’ を含む存在構文の中で、頻度が圧倒的に多く、また各作品に分布している。従って per を含む構文による存在文のもっとも普通のパターンとみなしてよいであろう。

for per ben no mo lyues bot two (*Cloud*, 54)

For per is no name, ne felyng ne beholdyng more...(*Privy*, 143)

Bot thare es souerayne fairenes, lyghtnes, strenghe...(*Rolle*, 40)

But pere is gold t siluer gret plentee. (*Mand*, 125)

t pere is gret plentee of water. (*Mand*, 131)

主語の NP は複数箇並ぶことは普通であるが、時には次のような極端な例も見られる。

For pare es no syn, no sorowe, no passion,...Bot thare es souerayne faires, lyghtnes, strenghe,...(*Rolle*, 40)

ここでは前半の否定部分に15、後半の肯定部分に14の NP が並ぶ列挙の文となっている。

次の文では主語に indefinite NP と definite NP の両種をあわせ持つ。

pere is no god but on t Machomete his messanger. (*Mand*, 92)

2.2. Per+ben+NP+X

主語の NP が節を従えているパターンはこの文型の半数を超える。

And vnder peise stages ben stables wel yvowted for the emperours
hors t...(Mand., 11)

And nygh besyde pat temple vpon the right syde is a chirche
couered with leed pat...(Mand., 58)

t abouen a gret partie in the halle is a VYNE made of fyn gold
(Mand., 143)

以上いずれも *Mand.* の文であるが、上 2 例では主語の NP に対して形容詞
(句) が後置され、下 3 例では過去分詞が配された型であるが、いずれも、
NP にかかる限定形容詞とも解される。

1.5. 従属節においても一例ながら、次のような 'LP+ben+NP' のパターン
が見られる。

I tolde hem pat in oure contree weren trees pat beren a
fruyt...(Mand., 176)

上文の LP が関係副詞にかわった型が次の文である。

where is gret plentee of corn t wyn. (Mand., 109)

vpon the which is anoper palays (Mand., 140)

In the which contree ben many kyngdomes t many dyuerse folk.
(Mand., 175)

次の例では一つの clause 中に二つの LP を含んでいる。

And besyde pat chirche is a chapell besyde the Roche pat...(Mamd.,
63)

t in mydd place of the mount is a gret lake in a full faire pleyn
(Mand., 131)

And besyde hem ben grete vyueres on pat o part t on pat other
(Mand., 141)

これらは、いずれも場所の副詞句が二分され、文頭と主語 NP の後に配さ

& bot if more wonder were, it schuld lede us into moche errour
(*Cloud*, 33)

& pat nou3t is in pi mynde bot only God. (*Cloud*, 33)

Also is ordeined pat, if any debate be bytwene any of pe
brotherede,...(*London*, 43)

ここでもやはり、その主語の NP の中に ‘more’ や ‘any’, ‘nou3t’ といった強
意的な語が見られる。また、上記例文の最初の文 (*Cloud*, 33) はこのパターン
で LP を伴わない、‘NP+ben’ の唯一のものである。

1.3. LP+ben+NP

頻度の点からすると、per を伴わない存在構文の中で、この型が圧倒的に多
い。現代英語の観点から見ると、副詞語句（この場合は LP）が文頭にきたた
めに惹起された inversion で、場合によっては per の脱落した型と見なされる。

ここにおいても、少なくとも ‘LP+NP+ben’ の型が殆んど見られないこと、
更には ‘NP+ben+LP’ 型が極めて限られていること等からして、むしろ基本
的パターンの一つと考えるのが妥当であろう。

3it in peese two lyues ben pre partyes (*Cloud*, 53)

for in him is alle ping, bope by cause & by beyng (*Cloud*, 79)

In knowyng is trauaile, in feling is rest. (*Privy*, 172)

‘In my fadir house erre many sere dwellynges’ (*Rolle*, 46)

At the desertes of Egypte was a worthi man pat...(*Mand.*, 30)

In this yle is a gret Ryuere pat is...(*Mand.*, 198)

In pat vale is gret plentee of gold t syluer (*Mand.*, 187)

1.4. LP+ben+NP+X

X の部分に形容詞もしくは過去分詞が来る型であるが、数的には極めて限
られている。

Besyde the yle of PENTEXOIRE pat is the lond of Prestre Iohn is
a gret yle long t brode pat...(*Mand.*, 184)

And in mydd place of pat vale vnder a roche is an hed t the visage
of a deuyl bodyliche, full horrible t dredfull to se. (*Mand.*, 187)

For euen so many willinges or desiringes—& no mo ne no fewer—
may be & aren in one oure in pi wille, as aren athomus in one oure
(*Cloud.*, 18)³⁾

Moche vanitee & falsheed is in peire hertes, causid of peire corious
worchyng,...(*Cloud.*, 105)

swa mekill contricyone was in his herte (*Rolle*, 7)

For as moche as rumour and spekyngge is amonges some men of
the Citee (*London*, 32)

t many oper relikes ben in Fraunce in the kynges Chapell (*Mand.*,
8)

Manye oper merueylles ben in pat cytee t in the contree pere a-
boutte (*Mand.*, 138)

現代英語においては少なくとも「there 存在文」の主要な特性は主語領域の空白化による文体的効果であり、この‘NP+be’の構文は極めて特殊な場合に限られている⁴⁾。しかし、14世紀のME 散文にあつては語順の固定化はまだその途次にあり、その意味では上述のような there 構文の文体的特質はその分、稀薄であつたものと思われる。だが、以下に見られるようにLPを文頭位にもつ‘NP+ben’の語順転倒型が頻出することからすると、むしろ、この‘NP+ben’型は‘LP+ben+S’型を基本型とする一つの異型と見なすことができよう。そしてそれは‘many’、‘moche’を含むことから推察できるように、NP 主語についてその存在が強調された文体と解するのが妥当であろう⁵⁾。

1.2. NP+ben+(LP) (従節)

従属節においては、次の三例が見られるのみである。

3) 括弧内末尾の数字は各テキストの頁数を表わす。

4) 中島によれば、主語領域に意味的には虚辞ともいえる there を置くことによって形成されるこの特殊構文は本来、単純判断形式で、二重判断を伴う‘NP+be’型の陳述とは本質的に異るとする。その他にも、このパターンに対して否定的な学者が居る。例えば、A. S. Hornby は‘preferable’でない、K. Shibbye は‘not possible’と考える。しかし現実には用例に事欠くことはない。(cf. 杉山隆一、‘Function Word *there* 構文—その特異性と実態’鹿児島県立短期大学『紀要』, No. 19 (1968), p. 114).

5) Perrin は *there* 構文に関して‘Frequent use of these impersonal constructions results in a loss of emphasis.’と述べ、それに対比して‘Direct’の指標のもとに‘NP+be+LP’の構文を示す。つまり、後者は前者に対比して強調的ニュアンスを持つパターンであると解される。(cf. P. G. Perrin: *Writer's Guide and Index to English*, p. 860).

十四世紀英語散文における Per 存在文

杉 山 隆 一

古代英語より見られる、いわゆる there 存在構文はいま一つの構文（つまり、主語 NP+be 動詞）との並存を経て、やがて不定の NP に限っては、後者を極めて限られた領域へと押しやってしまった。その拮抗から逆転への過程は中世英語期に起ったと考えられるが、少なくとも13世紀の ME 散文においては、まだ NP+ben の頻度は高く、per を含んだ存在文も多く見られるが、there (per) 構文の熟成度を示す文例は散見される程度である¹⁾。

そこで、それが14世紀においてはどのような状態であるのかをいくつかの散文作品について調べ、そこにどのような変化が見られるかを明らかにしたい²⁾。

1.0. まず、少なくとも OE では主流をなす 'NP+ben' を核とする存在文を見てみることにする。(但し、ここでは NP は特に断らない限り、不定の NP を表わす。)

1.1. NP+ben+LP

主節において 'NP+ben' の核（主要素）のみの存在表現は見られない。すべて、場所を表わす語句（以下 LP で表わす）を伴い、特に次例に見られるように NP の中に 'many' もしくは 'moche' という一種の強意語を含んでいる点が注目される。この文型によるものは全部で9例で、*Privy*を除くすべての作品に見られるが、例外なくそれら二語のうちのいずれかを含んでいる。

1) Cf. R. Sugiyama, 'Existential There in AB Language' in *Studies in English Philology and Linguistics in Honour of Dr. T. Matsunami*, (『英語学研究—松浪有博士還暦記念論文集』), 秀文インターナショナル, 1984. pp. 184-197.

2) 対象とした作品、並びに使用したテキストは次のものである。尚、各末尾の括弧内の表記は本文中の略記表示を表わす。 *The Cloud of Unknowing* (ed. P. Hodgson), EETS, o.s. 218, revised reprint 1973, (*Cloud, Privy*). *English Prose Treatises of Richard Rolle de Hampole*, (ed. G. G. Perry), EETS, o.s. 20, revised 1920, (*Rolle*). *A Book of London English 1384-1425*, (ed. R. W. Chambers & M. Daunt), reprint 1967, pp. 1-60, (*London*). *Mandeville's Travels*, (ed. P. Hamelius), EETS, o. s. 153, reprint 1974, (*Mand.*).